

グスコロブドリ
の伝記

宮沢賢治



グスコーブドリは、イーハトーヴの大きな森のなかに生まれました。おとうさんは、グスコーナドリという名高い木こりで、どんな大きな木でも、まるで赤ん坊を寝かしつけるようにわけなく切ってしまう人でした。

ブドリにはネリという妹があつて、二人は毎日森で遊びました。ごしつごしつとおとうさんの木を挽く音が、やつと聞こえるくらいな遠くへも行きました。二人はそこで木いちごの実をとつてわき水につけたり、空を向いてかわるがわる山鳩やまばとの鳴くまねをしたりしました。するとあちらでもこちらでも、ぼう、ぼう、と鳥が眠そうに鳴き出すのでした。

おかあさんが、家の前の小さな畑に麦を播まいているときは、

二人はみちにむしろをしいてすわつて、ブリキかんで蘭らんの花を煮たりしました。するとこんどは、もういろいろの鳥が、二人のぱさぱさした頭の上を、まるで挨拶あいさつするようにならなう鳴きながらざあざあざあざあ通りすぎるのでした。

ブドリが学校へ行くようになりますと、森はひるの間たいへんさびしくなりました。そのかわりひるすぎには、ブドリはネリといつしよに、森じゅうの木きの幹かみに、赤い粘土や消し炭で、木の名を書いてあるいたり、高く歌つたりしました。

ホップのつるが、両方からのびて、門のようになつていしらる白樺かばの木には、

「カッコウドリ、トオルベカラズ」と書いたりもしました。

そして、ブドリは十になり、ネリは七つになりました。ところがどういうわけですか、その年は、お日さまが春から夏に白

くて、いつもなら雪がとけるとまもなく、まつしろな花をつけるこぶしの木もまるで咲かず、五月になつてもたびたびみぞれ霽がぐしやぐしや降り、七月の末になつてもいつこうに暑さが来ないために、去年播まいた麦も粒の入らない白い穂しかできず、たいのいくだものの果物も、花が咲いただけで落ちてしまつたのでした。

そしてとうとう秋になりましたが、やつぱり栗くりの木は青いからのいがばかりでしたし、みんなでふだんたべるいちばんたいせつなオリザという穀物も、一つぶもできませんでした。野原ではもうひどいさわぎになつてしまいました。

ブドリのおとうさんもおかあさんも、たびたび薪たきぎを野原のほうへ持つて行つたり、冬になつてからは何べんも大きな木を町へそりで運んだりしたのでしたが、いつもがっかりしたようようにして、わずかの麦の粉などもつて帰つてくるのでした。それで

もどうにかその冬は過ぎて次の春になり、畑にはたいせつにし
 まつておいた種も播かれましたが、その年もまたすっかり前の年
 のとおりでした。そして秋になると、とうとうほんとうの饑饉ききん
 になってしまいました。もうそのころは学校へ来ることもま
 るでありませんでした。ブドリのおとうさんもおかあさんも、
 すっかり仕事をやめていました。そしてたびたび心配そうに相
 談しては、かわるがわる町へ出て行って、やつとすこしばかり
 の黍きびの粒など持って帰ることもあれば、なんにも持たずに顔い
 ろを悪くして帰ってくることもありました。そしてみんなは、
 こならの実や、葛くずやわらびの根や、木の柔らかな皮やいろんな
 ものをたべて、その冬をすごしました。

けれども春が来たころは、おとうさんもおかあさんも、何か
 ひどい病気のようにでした。

ある日おとうさんは、じつと頭をかかえて、いつまでもいつまでも考えていましたが、にわかには起きあがって、

「おれは森へ行つて遊んでくるぞ。」と言いながら、よろよろ家を出て行きましたが、まっくらになつても帰つて来ませんでした。二人がおかあさんに、おとうさんはどうしたろうときいても、おかあさんはだまつて二人の顔を見ているばかりでした。

次の日の晩方になつて、森がもう黒く見えるころ、おかあさんはにわかには立つて、炉に櫓ほだをたくさんくべて家じゆうすつかり明るくしました。それから、わたしはおとうさんをさがしに行くから、お前たちはうちにいてあの戸棚とだなにある粉を二人ですこしずつたべなさいと言つて、やつぱりよろよろ家を出て行きました。二人が泣いてあとから追つて行きますと、おかあさんはふり向いて、

「なんたらいうことをきかないこともらだ。」としかるように言いました。

そしてまるで足早に、つまずきながら森へはいつてしましました。二人は何べんも行ったたり来たりして、そこらを泣いて回りました。とうとうこらえ切れなくなつて、まつくらな森の中へはいつて、いつかのホップの門のあたりや、わき水のあるあたりをあちこちうろうろ歩きながら、おかあさんを一晩呼びました。森の木の間からは、星がちらちら何か言うようにひかり、鳥はたびたびおどろいたように暗やみの中を飛びましたけれども、どこからも人の声はしませんでした。とうとう二人はぼんやり家へ帰つて中へはいりますと、まるで死んだように眠つてしまいました。

ブドリが目をさましたのは、その日のひるすぎでした。

おかあさんの言つた粉のことを思い出して戸棚とだなをあけて見ますと、なかには、袋に入れたそば粉やこならの実がまだたくさんはいっていました。ブドリはネリをゆり起こして二人でその粉をなめ、おとうさんたちがいたときにように炉に火をたきました。

それから、二十日はつかばかりぼんやり過ぎましたら、ある日戸口で、

「今日は、だれかいるかね。」と言うものがありました。おとうさんが帰つて来たのかと思つて、ブドリがはね出して見ますと、それは籠かごをしようとした目の鋭い男でした。その男は籠の中から丸い餅もちをとり出してぽんと投げながら言いました。

「私はこの地方の飢饉ききんを助けに来たものだ。さあなんでも食べなさい。」二人はしばらくあきれていましたら、

「さあ食べるんだ、食べるんだ。」とまた言いました。二人がこわごわたべはじめますと、男はじつと見ていましたが、

「お前たちはいい子供だ。けれどもいい子供だというだけではなんにもならん。わしといっしょについておいで。もつとも男の子は強いし、わしも二人はつれて行けない。おい女の子、おまえはここにいてももうたべることがないんだ。おじさんといっしょに町へ行こう。毎日パンを食べさせてやるよ。」そしてふいつとネリを抱きあげて、せなかの籠へ入れて、そのまま、

「おおほいほい。おおほいほい。」とどなりながら、風のように家を出て行きました。ネリはおもてではじめてわつと泣き出し、ブドリは、

「どろぼう、どろぼう。」と泣きながら叫んで追いかけてましたが、男はもう森の横を通つてずうつと向こうの草原を走つてい

て、そこからネリの泣き声が、かすかにふるえて聞こえるだけでした。

ブドリは、泣いてどなつて森のはずれまで追いかけて行きましたが、とうとう疲れてばったり倒れてしまいました。

二 てぐす工場

ブドリがふつと目をひらいたとき、いきなり頭の上で、いやに平べつたい声がしました。

「やつと目がさめたな。まだお前は飢饉ききんのつもりかい。起きておれに手伝わがいとないか。」見るとそれは茶いろなきのこし、やつぽをかぶつて外套がいとにすぐシャツを着た男で、何か針金でこさえたものをぶらぶら持っているのです。

「もう飢饉は過ぎたの？ 手伝えつて何を手伝うの？」

ブドリがききました。

「網掛けさ。」

「ここへ網を掛けるの？」

「掛けるのさ。」

「網をかけて何にするの？」

「てぐすを飼うのさ。」見るとすぐブドリの前の栗くりの木に、二人の男がはしごをかけてのぼつていて、一生けん命何か網を投げたり、それを操あやつつたりしているようでしたが、網も糸もいっとう見えませんでした。

「あれでてぐすが飼えるの？」

「飼えるのさ。うるさいこどもだな。おい、縁起でもないぞ。

てぐすも飼えないところはどうして工場なんか建てるんだ。飼

えるともさ。現におれをはじめたくさんのものが、それでくらしを立てているんだ。」

ブドリはかすれた声で、やつと、

「そうですか。」と言いました。

「それにこの森は、すっかりおれが買ってあるんだから、ここで手伝うならいいが、それでもなければどこかへ行ってもらいたいな。もつともお前はどこへ行つたつて食うものもなからうぜ。」

ブドリは泣き出しそうになりましたが、やつとこらえて言いました。

「そんなら手伝うよ。けれどもどうして網をかけるの？」

「それはもちろん教えてやる。こいつをね。」男は、手に持った針金の籠かごのようなものを両手で引き伸ばしました。

「いいか。こういう具合にやるとはしごになるんだ。」

男は大またに右手の栗くりの木に歩いて行つて、下の枝に引つ掛
けました。

「さあ、今度はおまえが、この網をもつて上へのぼつて行くん
だ。さあ、のぼつてごらん。」

男は変なまりのようなものをブドリに渡しました。ブドリは
しかたなくそれをもつてはしごにとりついて登つて行きました
が、はしごの段々がまるで細くて手や足に食いこんでちぎれて
しまいそうでした。

「もつと登るんだ。もつと、もつとき。そしたらさつきのみり、
を投げてごらん。栗の木を越すようにさ。そいつを空へ投げる
んだよ。なんだい、ふるえてるのかい。いくじなしだなあ。投
げるんだよ。投げるんだよ。そら、投げるんだよ。」

ブドリはしかたなく力いっぱいそれを青空に投げたと思いましたが、にわかにお日さまがまつ黒に見えて逆しまに下へおちました。そしていつか、その男に受けとめられていたのです。男はブドリを地面におろしながらぶりぶりおこり出しました。

「お前もいくじのないやつだ。なんというふにやふにやだ。おれが受け止めてやらなかつたらお前は今ごろは頭がはじけていたろう。おれはお前の命の恩人だぞ。これからは、失礼なことを言つてはならん。ところで、さあ、こんどはあつちの木へ登れ。も少したつたらごはんもたべさせてやるよ。」男はまたブドリへ新しいまりを渡しました。ブドリははしごをもつて次の木へ行つてまりを投げました。

「よし、なかなかじょうずになつた。さあ、まりはたくさんあ

るぞ。なまけるな。木も栗の木ならどれでもいいんだ。」

男はポケットから、まりを十ばかり出してブドリに渡すと、すたすた向こうへ行つてしまいました。ブドリはまた三つばかりそれを投げましたが、どうしても息がはあはあして、からだがだるくてたまらなくなりました。もう家へ帰ろうと思つて、そつちへ行つて見ますと、おどろいたことには、家にはいつか赤い土管の煙突がついて、戸口には、「イーハトーヴてぐす工場」という看板がかかっているのです。そして中からたばこをふかしながら、さっきの男が出て来ました。

「さあこども、たべものをもつてきてやつたぞ。これを食べて暗くならないうちにもう少しかせぐんだ。」

「ぼくはもういやだよ、うちへ帰るよ。」

「うちつていうのはあすこか。あすこはおまえのうちじゃない。」

おれのでぐす工場だよ。あの家もこの辺の森もみんなおれが買ったのであるんだからな。」

ブドリはもうやけになって、だまつてその男のよこした蒸しパンをむしやむしやたべて、またまりを十ばかり投げました。

その晩ブドリは、昔のじぶんのうち、いまはてぐす工場になっている建物のすみに、小さくなつてねむりました。

さつきの男は、三四人の知らない人たちとおそくまで炉ばたで火をたいて、何か飲んだりしやべつたりしていました。次の朝早くから、ブドリは森に出て、きのうのようにはたらきました。

それから一月ばかりたつて、森じゅうの栗くりの木に網がかかってしまいますと、てぐす飼いの男は、こんどは栗あわのようなものがいっぱいついた板きれを、どの木にも五六枚ずつつるさせま

した。そのうちに木は芽を出して森はまっ青さおになりました。すると、木につるした板きれから、たくさんの小さな青じろい虫が糸をつたつて列になつて枝へはいあがつて行きました。

ブドリたちはこんどは毎日薪たきぎとりをさせられました。その薪が、家のまわりに小山のように積み重なり、栗くりの木が青じろいひものかたちの花を枝いちめんにつけるころになりますと、あの板からはいあがつて行つた虫も、ちょうど栗の花のような色とかたちになりました。そして森じゅうの栗の葉は、まるで形もなくその虫に食い荒らされてしまいました。

それからまもなく、虫は大きな黄いろな繭かごを、網の目ごとにかけはじめました。

するとてぐす飼いの男は、狂気かきのようになつて、ブドリたちをしっかりとばして、その繭かごを籠かごに集めさせました。それをこん

どは片つぱしから鍋なべに入れてぐらぐら煮て、手で車をまわしながら糸をとりました。夜も昼もがらがらがら三つの糸車をまわして糸をとりました。こうしてこしらえた黄いろな糸が小屋に半分ばかりたまつたころ、外に置いた繭からは、大きな白い蛾ががぼろぼろぼろ飛びだしはじめました。てぐす飼いの男は、まるで鬼みたいな顔つきになつて、じぶんも一生けん命糸をとりましたし、野原のほうからも四人の人を連れてきて働かせました。けれども蛾のほうは日ましに多く出るようになつて、しまいには森じゅうまるで雪でも飛んでいるようになりました。するとある日、六七台の荷馬車が来て、いままでにできた糸をみんなつけて、町のほうへ帰りはじめました。みんなも一人ずつ荷馬車について行きました。いちばんしまいの荷馬車がたつたとき、てぐす飼いの男が、ブドリに、

「おい、お前の来春まで食うくらいのは家の中に置いてやるからな。それまでここで森と工場の番をしているんだぞ。」
 と言つて、変ににやにやしなから荷馬車についてさつきと行つてしまいました。

ブドリはぼんやりあとへ残りました。うちの中はまるできたなくてあらしのあとのようでしたし、森は荒れはてて山火事にもあつたようでした。ブドリが次の日、家のなかやまわりを片付けはじめましたら、てぐす飼いの男がいつもすわっていた所から古いボール紙の箱を見つけました。中には十冊ばかりの本がぎっしりはいつておりました。開いて見ると、てぐすの絵や機械の図がたくさんある、まるで読めない本もありましたし、いろいろな木や草の図と名前の書いてあるものもありました。ブドリはいっしょうけんめい、その本のまねをして字を書い

たり、凶をうつしたりしてその冬を暮らしました。

春になりますと、またあの男が六七人のあたらしい手下を連れて、たいへん立派ななりをしてやって来ました。そして次の日からすっかり去年のような仕事が始まりました。

そして網はみんなかかり、黄いろな板もつるされ、虫は枝にはい上がり、ブドリたちはまた、薪作りたきぎにかかることになりました。ある朝ブドリたちが薪をつくっていましたら、にわかにくらぐらつと地震がはじまりました。それからずうつと遠くでどーんという音がしました。

しばらくたつと日が変にくらくなり、こまかな灰がばさばさばさばさ降って来て、森はいちめんめんにまつ白になりました。ブドリたちがあきれて木の下にしゃがんでいましたら、てぐす飼いの男がたいへんあわててやって来ました。

「おい、みんな、もうだめだぞ。噴火だ。噴火がはじまったんだ。てぐすはみんな灰をかぶって死んでしまった。みんな早く引き揚げてくれ。おい、ブドリ、お前ここにいたかつたらいてもいいが、こんどはたべ物は置いてやらないぞ。それにここにもあぶないからな。お前も野原へ出て何かかせぐほうがいぜ。」

そう言ったかと思うと、もうどんどん走って行ってしまいました。ブドリが工場へ行つて見たときは、もうだれもおりませんでした。そこでブドリは、しょんぼりとみんなの足跡のついた白い灰をふんで野原のほうへ出て行きました。

三 沼ばたけ

ブドリは、いつぱいに灰をかぶった森の間を、町のほうへ半日歩きつづけました。灰は風の吹くたびに木からばさばさ落ちて、まるでけむりか吹雪ふぶきのようでした。けれどもそれは野原へ近づくほど、だんだん浅く少なくなつて、ついには木も緑に見え、みちの足跡も見えないくらいになりました。

とうとう森を出切つたとき、ブドリは思わず目をみはりました。野原は目の前から、遠くのまつしろな雲まで、美しい桃いろと緑と灰いろのカードでできているようでした。そばへ寄つて見ると、その桃いろなものには、いちめんいちめんにせいせいの低い花が咲いていて、蜜蜂みつばちがいそがしく花から花をわたつてあるいましたし、緑いろなものには小さな穂を出して草がぎっしりはえ、灰いろなのは浅い泥の沼でした。そしてどれも、低い幅のせまい土手でくぎられ、人は馬を使ってそれを掘り起こしたりかき

回したりしてはたらいていました。

ブドリがその間を、しばらく歩いて行きますと、道のまん中に二人の人が、大声で何かけんかでもするように言い合っていました。右側のほうのひげのあか赭い人が言いました。

「なんでもかんでも、おれは山師張るときめた。」

すると一人の白い笠かさをかぶった、せいの高いおじいさんが言いました。

「やめろつて言ったらやめるもんだ。そんなに肥料うんと入れて、藁わらはとれるたつて、実は一粒もとれるもんでない。」

「うんにや、おれの見込みでは、ことしは今までの三年分暑いに相違ない。一年で三年分とつて見せる。」

「やめろ。やめろ。やめろつたら。」

「うんにや、やめない。花はみんな埋めてしまったから、こんど

は豆玉を六十枚入れて、それから鶏の糞かえし、百駄だん入れるんだ。急がしつたらなんの、こう忙しくなればさ、さげのつるでもいいから手伝いに頼みたいもんだ。」

ブドリは思わず近寄っておじぎをしました。

「そんならぼくを使つてくれませんか。」

すると二人は、ぎよつとしたように顔をあげて、あごに手をあててしばらくブドリを見ていましたが、赤ひげがにわかにか笑い出しました。

「よしよし。お前に馬の指竿ささせとりを頼むからな。すぐおれについて行くんだ。それではまず、のるかそるか、秋まで見てくれ。さあ行こう。ほんとに、さ、さげのつるでもいいから頼みたい時でな。」赤ひげは、ブドリとおじいさんにかわるがわる言いながら、さつきと先に立って歩きました。あとではおじいさん

が、

「年寄りの言うこと聞かないで、いまに泣くんだな。」とつぶやきながら、しばらくこつちを見送っているようすでした。

それからブドリは、毎日毎日沼ばたけへは行って馬を使って泥をかき回しました。一日ごとに桃いろのカードも緑のカードもだんだんつぶされて、泥沼に変わるのでした。馬はたびたびぴしゃつと泥水をはねあげて、みんなの顔へ打ちつけました。一つの沼ばたけがすめばすぐ次の沼ばたけへはいるのでした。一日がとても長くて、しまいには歩いているのかどうかもわからなくなったり、泥が飴あめのような、水がスープのような気がしたりするのでした。風が何べんも吹いて来て、近くの泥水に魚のうろこのような波をたて、遠くの水をブリキいろにして行きました。そらでは、毎日甘くすっぱいような雲が、ゆつくりゆつ

くりながれていて、それがじつにうらやましそうに見えました。こうして二十日はつかばかりたちますと、やっと沼ばたけはすつかりどろどろになりました。次の朝から主人はまるで気が立って、あちこちから集まつて来た人たちといっしよに、その沼ばたけに緑いろの槍やりのようなオリザの苗をいちめん植えました。それが十日ばかりで済むと、今度はブドリたちを連れて、今まで手伝ってもらった人たちの家へ毎日働きにでかけました。それもやつと一まわり済むと、こんどはまたじぶんの沼ばたけへ戻つて来て、毎日毎日草取りをはじめました。ブドリの主人の苗は大きくなつてまるで黒いくらいなのに、となりの沼ばたけはぼんやりしたうすい緑いろでしたから、遠くから見ても、二人の沼ばたけははっきり境まで見わかりました。七日ばかりで草取りが済むとまたほかへ手伝いに行きました。

ところがある朝、主人はブドリを連れて、じぶんの沼ばたけを通りながら、にわかにな「あつ」と叫んで棒立ちになってしまいました。見るとくちびるのいろまで水いろになつて、ぼんやりまっすぐを見つめているのです。

「病気が出たんだ。」主人がやつと言いました。

「頭でも痛いんですか。」ブドリはききました。

「おれでないよ。オリザよ。それ。」主人は前のオリザの株を指さしました。ブドリはしゃがんでしらべてみますと。なるほどどの葉にも、いままで見たことのない赤い点々がついていました。主人はだまつてしおしおと沼ばたけを一まわりしましたが、家へ帰りはじめました。ブドリも心配してついて行きますと、主人はだまつて巾きれを水でしぼつて、頭にのせると、そのまま板の間に寝てしまいました。するとまもなく、主人のおかみ

さんが表からかけ込んで来ました。

「オリザへ病気が出たというのはほんとうかい。」

「ああ、もうだめだよ。」

「どうにかならないのかい。」

「だめだろう。すっかり五年前のおりだ。」

「だから、あたしはあんたに山師をやめろといったんじゃないか。おじいさんもあんなにとめたんじゃないか。」

おかみさんはおろおろ泣きはじめました。すると主人がとにかくに元気になってむっくり起き上がりました。

「よし。イーハトーヴの野原で、指折り数えられる大百姓のおれが、こんなことで参るか。よし。来年こそやるぞ。ブドリ、おまえおれのうちへ来てから、まだ一晩も寝たいくらい寝たことがないな。さあ、五日でも十日でもいいから、ぐうというく

らい寝てしまえ。おれはそのあとで、あすこの沼ばたけでおもしろい手品てずまをやつて見せるからな。その代わりことしの冬は、家じゅうそばばかり食うんだぞ。おまえそばはすきだろうが。」それから主人はさつきと帽子をかぶつて外へ出て行つてしまいました。

ブドリは主人に言われたとおりに納屋なやへはいつて眠ろうと思いましたが、なんだかやつぱり沼ばたけが苦になつてしかたないので、またのろのろそつちへ行つて見ました。するといつ来ていたのか、主人がたった一人腕組みをして土手に立つておりました。見ると沼ばたけには水がいつぱいで、オリザの株は葉をやつと出しているだけ、上にはぎらぎら石油が浮かんでいるのでした。主人が言いました。

「いまおれ、この病気を蒸し殺してみるところだ。」

「石油で病気の種が死ぬんですか。」とブドリがききますと、主人は、

「頭から石油につけられたら人だって死ぬだ。」と言いながら、ほうと息を吸って首をちぢめました。その時、水下の沼ばたけの持ち主が、肩をいからして、息を切ってかけて来て、大きな声でどなりました。

「なんだって油など水へ入れるんだ。みんな流れて来て、おれのほうへはいってるぞ。」

主人は、やけくそに落ちついて答えました。

「なんだって油など水へ入れるったって、オリザへ病気がついたから、油など水へ入れるのだ。」

「なんだってそんならおれのほうへ流すんだ。」

「なんだってそんならおまえのほうへ流すったって、水は流れ

るから油もついて流れるのだ。」

「そんならなんだつておれのほうへ水こないように水口みなぐちとめないんだ。」

「なんだつておまえのほうへ水行かないように水口とめないかつたつて、あすこはおれのみな口でないから水とめないのだ。」

となりの男は、かんかんおこつてしまつてもう物も言えず、いきなりがぶがぶ水へはいつて、自分の水口に泥を積みあげはじめました。主人はにやりと笑いました。

「あの男むずかしい男でな。こつちで水をとめると、とめたといつておこるからわざと向こうにとめさせたのだ。あすこさえとめれば今夜じゅうに水はすっかり草の頭までかかるからな、さあ帰ろう。」主人はさきに立つてすたすた家へあるきはじめました。

次の朝ブドリはまた主人と沼ばたけへ行ってみました。主人は水の中から葉を一枚とつてしきりにしらべていましたが、やっぱり浮かぬ顔でした。その次の日もそうでした。その次の日もそうでした。その次の日もそうでした。その次の朝、とうとう主人は決心したように言いました。

「さあブドリ、いよいよここへ蕎麦播きだぞ。おまえあすこへ行つて、となりの水口こわして来い。」

ブドリは、言われたとおりこわして来ました。石油のはいつた水は、恐ろしい勢いでとなりの田へ流れて行きます。きつとまたおこつてくるなと思つていますと、ひるごろ例のとなりの持ち主が、大きな鎌かまをもつてやつてきました。

「やあ、なんだつてひとの田へ石油ながすんだ。」

主人がまた、腹の底から声を出して答えました。

「石油ながればなんだって悪いんだ。」

「オリザみんな死ぬでないか。」

「オリザみんな死ぬか、オリザみんな死なないか、まずおれの沼ばたけのオリザ見なよ。きょうで四日頭から石油かぶせたんだ。それでもちやんとこのとおりでないか。赤くなつたのは病気のためで、勢いのいいのは石油のためなんだ。おまえの所など、石油がただオリザの足を通るだけでないか。かえつていいかもしれないんだ。」

「石油こやしになるのか。」向こうの男は少し顔いろをやわらげました。

「石油こやしになるか、石油こやしにならないか知らないが、とにかく石油は油でないか。」

「それは石油は油だな。」男はすっかりきげんを直してわらいま

した。水はどんどん退ひき、オリザの株は見る見る根もとまで出て来ました。すっかり赤い斑まだらができて焼けたようになっています。

「さあおれの所ではもうオリザ刈りをやるぞ。」

主人は笑いながら言つて、それからブドリといっしょに、片つぱしからオリザの株を刈り、跡へすぐ蕎麦そばを播まいて土をかけて歩きました。そしてその年はほんとうに主人の言つたとおり、ブドリの家では蕎麦ばかり食べました。次の春になると主人が言いました。

「ブドリ、ことしは沼ぬばたけは去年よりは三分の一減つたからな、仕事はよほどらくだ。そのかわりおまえは、おれの死んだ息子の読むすこんだ本をこれから一生けん命勉強して、いままでおれを山師だといつてわらつたやつらを、あつと言わせるような立

派なオリザを作るくふうをしてくれ。」

そして、いろいろな本を一山ブドリに渡しました。ブドリは仕事のひまに片っぱしからそれを読みました。ことにその中の、クーボーという人の物の考え方を教えた本はおもしろかったの
 で何べんも読みました。またその人が、イーハトーヴの市で一
 か月の学校をやっているのを知って、たいへん行って習いたい
 と思ったりしました。

そして早くもその夏、ブドリは大きな手柄をたてました。そ
 れは去年と同じころ、またオリザに病気ができかかったのを、ブ
 ドリが木の灰と食塩しおを使って食いとめたのでした。そして八月
 のなかばになると、オリザの株はみんなそろって穂を出し、そ
 の穂の一枝ごとに小さな白い花が咲き、花はだんだん水いろの
 朶もみにかわって、風にゆらゆら波をたてるようになりました。主

人はもう得意の絶頂でした。来る人ごとに、

「なんの、おれも、オリザの山師で四年しくじったけれども、こ
としは一度に四年分とれる。これもまたなかなかいいもんだ。」
などと言つて自慢するのです。

ところがその次の年はそうは行きませんでした。植え付けの
ころからさつぱり雨が降らなかつたために、水路はかわいてし
まい、沼にはひびが入つて、秋のとりいれはやつと冬じゅう食
べるくらいでした。来年こそと思つていましたが、次の年もま
た同じようなひでりでした。それから、来年こそ来年こそと
思いながら、ブドリの主人は、だんだんこやしを入れることが
できなくなり、馬も売り、沼ばたけもだんだん売つてしまつた
のでした。

ある秋の日、主人はブドリにつらそうに言いました。

「ブドリ、おれももとはイーハトーヴの老百姓だったし、ずいぶんかせいでも来たのだが、たびたびの寒さと早魃かんぼつのために、いまでは沼ばたけも昔の三分の一になってしまったし、来年はもう入れるこやしもないのだ。おれだけでない。来年こやしを買って入れられる人つたらもうイーハトーヴにも何人もないだろう。こういうあんばいでは、いつになつておまえにはたらいてもらつた礼をするというあてもない。おまえも若い働き盛りを、おれのところで暮らしてしまつてはあんまり気の毒だから、濟まないがどうかこれを持つて、どこへでも行つていい運を見つけてくれ。」そして主人は、一ふくろのお金と新しい紺で染めた麻の服と赤皮の靴くつとをブドリにくれました。

ブドリはいまままでの仕事のひどかつたことも忘れてしまつて、もう何もいらぬから、ここで働いていたいと思いましたが、

考えてみると、いてもやっぱり仕事もそんなにないので、主人に何べんも何べんも礼を言つて、六年の間はたらいた沼ばたけと主人に別れて、停車場をさして歩きだしました。

四　クーパー大博士

ブドリは二時間ばかり歩いて、停車場へ来ました。それから切符を買つて、イーハトーヴ行き of 汽車に乗りました。汽車はいくつもの沼ばたけをどんどんどんうしろへ送りながら、もう一散に走りました。その向こうには、たくさんの黒い森が、次から次と形を変えて、やっぱりうしろのほうへ残されて行くのでした。ブドリはいろいろな思いで胸がいつぱいでした。早くイーハトーヴの市に着いて、あの親切な本を書いたクーパー

という人に会い、できるなら、働きながら勉強して、みんなが
あんなにつらい思いをしないで沼ばたけを作れるよう、また火
山の灰だのひでりだの寒さだのを除くくふうをしたいと思うと、
汽車さえまどろこくつてたまらないくらいでした。汽車はその
日のひるすぎ、イーハトーヴの市に着きました。停車場を一足
出ますと、地面の底から、何かのんのんわくようなひびきやど
んよりとしたくらい空気、行ったり来たりするたくさんさんの自動
車に、ブドリはしばらくぼうとしてつつ立ってしまいました。
やっと気をとりなおして、そこらの人にクーボー博士の学校へ
行くみちをたずねました。するとだれへきいても、みんなブド
リのあまりまじめな顔を見て、吹き出しそうにしながら、

「そんな学校は知らんね。」とか、

「もう五六丁行ってきいてみな。」とかいうのでした。そしてブ

ドリがやつと学校をさがしあてたのはもう夕方近くでした。その大きなこわれかかった白い建物の二階で、だれか大きな声でしゃべっていました。

「今日は。」ブドリは高く叫びました。だれも出てきませんでした。

「今日はあ。」ブドリはあらん限り高く叫びました。するとすぐ頭の上の二階の窓から、大きな灰いろの顔が出て、めがねが二つぎらりと光りました。それから、

「今授業中だよ、やかましいやつだ。用があるならはいつて来い。」とどなりつけて、すぐ顔を引っ込めますと、中ではおおぜいでどつと笑い、その人はかまわずまた何か大声でしゃべっています。

ブドリはそこで思い切つて、なるべく足音をたてないように

二階にあがって行きますと、階段のつき当たりの扉とひらがあいていて、じつに大きな教室が、ブドリのまっ正面にあらわれました。中にはさまざまの服装をした学生がぎっしりです。向こうは大きな黒い壁になっていて、そこにたくさんやぐらの白い線が引いてあり、さつきのせいの高い目がねをかけた人が、大きな櫓やぐらの形の模型をあちこち指さしながら、さつきのままの高い声で、みんなに説明しておりました。

ブドリはそれを一目見ると、ああこれは先生の本に書いてあった歴史の歴史ということの模型だと思いました。先生は笑いながら、一つのとつてを回しました。模型はがちつと鳴って奇体な船のような形になりました。またがちつととつてを回すと、模型はこんどは大きなむかでのような形に変わりました。

みんなはしきりに首をかたむけて、どうもわからんというふ

うにしていますでしたが、ブドリにはただおもしろかったのです。「そこでこういう図ができる。」先生は黒い壁へ別の込み入った図をどンドン書きました。

左手にもチョークをもつて、さつさと書きました。学生たちもみんな一生けん命そのまねをしました。ブドリもふところから、いままで沼ばたけで持っていたきたない手帳を出して図を書きとりました。先生はもう書いてしまつて、壇の上になつづくに立つて、じろじろ学生たちの席を見まわしています。ブドリも書いてしまつて、その図を縦横から見えていますと、ブドリのとなりで一人の学生が、

「あああ。」とあくびをしました。ブドリはそつとききました。「ね、この先生はなんて言うんですか。」

すると学生はばかにしたように鼻でわらいながら答えました。

「クーボー大博士さ、お前知らなかつたのかい。」それからじろじろブドリのようすを見ながら、

「はじめから、この図なんか書けるもんか。ぼくでさえ同じ講義をもう六年もきいているんだ。」

と言つて、じぶんのノートをふところへしまつてしまいました。その時教室に、ぱつと電燈がつかまりました。もう夕方だったので。大博士が向こうで言いました。

「いまや夕べははるかにきたり、拙講もまた全課をおえた。諸君のうちの希望者は、けだしいつもの例により、そのノートをば拙者に示し、さらに数箇の試問を受けて、所属を決すべきである。」学生たちはわあと叫んで、みんなばたばたノートをとじました。それからそのまま帰つてしまうものが大部分でしたが、五六十人は一列になつて大博士の前をとおりながらノートを開

いて見せるのでした。すると大博士はそれをちよつと見て、一言か二言質問をして、それから白墨でえりへ、「合」とか、「再来」とか、「奮励」とか書くのでした。学生はその間、いかにも心配そうに首をちぢめているのですが、それからそつと肩をすぼめて廊下まで出て、友だちにそのしるしを読んでもらつて、よろこんだりしよげたりするのでした。

ぐんぐん試験が済んで、いよいよブドリ一人になりました。ブドリがその小さなきたない手帳を出したとき、クーボー大博士は大きなあくびをやりながら、かがんで目をぐつと手帳につけるようにしましたので、手帳はあぶなく大博士に吸い込まれそうになりました。

ところが大博士は、うまそうにこくつと一つ息をして、「よろしい。この図は非常に正しくできている。そのほかのところ

は、なんだ。ははあ、沼ばたけのこやしのこと、馬のたべ物のことかね。では問題に答えなさい。工場の煙突から出るけむりには、どういう色の種類があるか。」

ブドリは思わず大声に答えました。

「黒、褐^{かち}、黄、灰、白、無色。それからこれらの混合です。」
大博士はわらいました。

「無色のけむりはたいへんいい。形について言いたまえ。」

「無風で煙が相当あれば、たての棒にもなりますが、さきはだんだんひろがります。雲の非常に低い日は、棒は雲までのぼって行つて、そこから横にひろがります。風のある日は、棒は斜めになります。その傾きは風の程度に従います。波やいくつもきれになるのは、風のためにもよりますが、一つはけむりや煙突のもつ癖のためです。あまり煙の少ないときは、コルク抜

きの形にもなり、煙も重いガスがまじれば、煙突の口から房ふかになつて、一方ないし四方におちることもあります。」

大博士はまたわらいました。

「よろしい。きみはどういう仕事をしているのか。」

「仕事をみつけに来たんです。」

「おもしろい仕事がある。名刺をあげるから、そこへすぐ行きなさい。」博士は名刺をとり出して、何かするする書き込んでブドリにくれました。ブドリはおじぎをして、戸口を出て行こうとしますと、大博士はちよつと目で答えて、

「なんだ、ごみを焼いてるのかな。」と低くつぶやきながら、テールの上にあつた鞆かぼんに、白墨チヨークのかけらや、はんけちや本や、みんないつしよに投げ込んで小わきにかかえ、さつき顔を出した窓から、ピイツと外へ飛び出しました。びつくりしてブドリが

窓へかけよつて見ますと、いつか大博士は玩具おもちゃのような小さな飛行船に乗つて、じぶんでハンドルをとりながら、もううす青いもやのこめた町の上を、まつすぐに向こうへ飛んでいるのでした。ブドリがいよいよあきれて見ていますと、まもなく大博士は、向こうの大きな灰いろの建物の平屋根に着いて、船を何かかぎのようなものにつなぐと、そのままぼろつと建物の中へはいつて見えなくなつてしまいました。

五 イーハトーヴ火山局

ブドリが、クーボー大博士からもらった名刺のあて名をたずねて、やつと着いたところは大きな茶いろの建物で、うしろには房ふさのような形をした高い柱が夜のそらにくつきり白く立つて

おりました。ブドリは玄関に上がって呼び鈴を押しますと、すぐ人が出て来て、ブドリの出した名刺を受け取り、一目見ると、すぐブドリを突き当たりの大きな室へ案内しました。

そこにはいままでに見たこともないような大きなテーブルがあつて、そのまん中に一人の少し髪が白くなつた人のよさそうな立派な人が、きちんとすわつて耳に受話器をあてながら何か書いていました。そしてブドリのはいつて来たのを見ると、すぐ横の椅子いすを指さしながら、また続けて何か書きつけています。

その室の右手の壁いっぱいには、イーハトーヴ全体の地図が、美しく色どつた大きな模型に作つてあつて、鉄道も町も川も野原もみんな一目でわかるようになっており、そのまん中を走るせぼねのような山脈と、海岸に沿つて縁をとつたようになっていゝる山脈、またそれから枝を出して海の中に点々の島をつくつて

いる一列の山々には、みんな赤や橙だいたいや黄のあかりがついていて、それがかわるがわる色が変わったたりジーンと蝉せみのように鳴ったり、数字が現われたり消えたりしているのです。下の壁に添った柵たなには、黒いタイプライターのようなのが三列に百でもきかないくらい並んで、みんなしずかに動いたり鳴ったりしてました。ブドリがわれを忘れて見とれておりますと、その人が受話器をことごと置いて、ふところから名刺入れを出して、一枚の名刺をブドリに出しながら「あなたが、グスコープドリ君ですか。私はこういうものです。」と言いました。見ると、イーハトーヴ火山局技師ペンネンナムと書いてありました。その人はブドリの挨拶あいさつになれないでもじもじしているのを見ると、重ねて親切に言いました。

「さつきクーパー博士から電話があつたのでお待ちしていまし

た。まあこれから、ここで仕事をしながらしつかり勉強してごらんなさい。ここの仕事は、去年はじまったばかりですが、じつに責任のあるもので、それに半分はいつ噴火するかわからない火山の上で仕事するものなのです。それに火山の癖というものも、なかなか学問でわかることではないのです。われわれはこれからよほどしつかりやらなければならんです。では今晩はあつちにあなたの泊まる場所がありますから、そこでゆっくりお休みなさい。あしたこの建物じゅうをすつかり案内しますから。」

次の朝、ブドリはペンネン老技師に連れられて、建物のなかを一々つれて歩いてもらい、さまざまの機械やしかけを詳しく教わりました。その建物のなかのすべての器械はみんなイーハトーヴじゅうの三百幾つかの活火山や休火山に続いていて、そ

これらの火山の煙や灰を噴ふいたり、熔岩ようがんを流したりしているようすはもちろん、みかけはじつとしている古い火山でも、その中の熔岩やガスのもようから、山の形の変わりようまで、みんな数字になったり図になったりして、あらわれて来るのでした。そしてはげしい変化のあるたびに、模型はみんな別々の音で鳴るのでした。

ブドリはその日からベンネン老技師について、すべての器械の扱い方や観測のしかたを習い、夜も昼も一心に働いたり勉強したりしました。そして二年ばかりたちますと、ブドリはほかの人たちといっしょにあちこちの火山へ器械を据え付けに出されたり、据え付けてある器械の悪くなったのを修繕にやられたりもするようになりましたので、もうブドリにはイーハトーヴの三百幾つの火山と、その働き具合は掌たなごころの中にあるようにわ

かつて来ました。

じつにイーハトーヴには、七十幾つの火山が毎日煙をあげたり、熔岩を流したりしているのです。五十幾つかの休火山は、いろいろなガスを噴いたり、熱い湯を出したりしていました。そして残りの百六七十の死火山のうちにも、いつまた何を始めるかわからないものもあるのです。

ある日ブドリが老技師とやらんで仕事をしておりますと、にわかにはサンムトリという南のほうの海岸にある火山が、むくむく器械に感じ出して来ました。老技師が叫びました。

「ブドリ君。サンムトリは、けさまで何もなかったね。」

「はい、いままでサンムトリのはたらいたのを見たことがあります。ません。」

「ああ、これはもう噴火が近い。けさの地震が刺激したのだ。」

この山の北十キロのところにはサンムトリの市がある。今度爆発すれば、たぶん山は三分の一、北側をはねとばして、牛やテールブルぐらいの岩は熱い灰やガスといっしょに、どしどしサンムトリ市におちてくる。どうでも今のうちに、この海に向いたほうへボーリングを入れて傷口をこさえて、ガスを抜くか熔岩を出させるかしなければならぬ。今すぐ二人で見に行こう。」二人はすぐにしたくして、サンムトリ行き汽車に乗りました。

六 サンムトリ火山

二人は次の朝、サンムトリの市に着き、ひるごろサンムトリ火山の頂近く、観測器械を置いてある小屋に登りました。そこは、サンムトリ山の古い噴火口の外輪山が、海のほうへ向いて

欠けた所で、その小屋の窓からながめますと、海は青や灰いろの幾つもの縞しまになつて見え、その中を汽船は黒いけむりを吐き、銀いろの水脈みおを引いていくつもすべっているのです。

老技師はしずかにすべての観測機を調べ、それからブドリに言いました。

「きみはこの山はあと何日ぐらいで噴火すると思うか。」

「一月はもたないと思います。」

「一月はもたない。もう十日ももたない。早く工作してしまわないと、取り返しをつかないことになる。私はこの山の海に向いたほうでは、あすこがいちばん弱いと思う。」老技師は山腹の谷の上のうす緑の草地を指さしました。そこを雲の影がしずかに青くすべっているのです。

「あすこには熔岩ようがんの層が二つしかない。あとは柔らかな火山灰

と火山礫かざんれきの層だ。それにあすこまでは牧場の道も立派にあるから、材料を運ぶことも造作ぞうさない。ぼくは工作隊を申請しよう。」

老技師は忙しく局へ発信をはじめました。その時足の下では、つぶやくようなかすかな音がして、観測小屋はしばらくしきしきしきしみました。老技師は器械をはなれました。

「局からすぐ工作隊を出すそうだ。工作隊といつても半分決死隊だ。私はいままでに、こんな危険に迫った仕事をしたことがない。」

「十日のうちに見えるでしょうか。」

「きつとできる。装置には三日、サンムトリ市の発電所から、電線を引いてくるには五日かかるな。」

技師はしばらく指を折って考えていましたが、やがて安心してようやくにまたしずかに言いました。

「とにかくブドリ君。一つ茶をわかして飲もうではないか。あんまりいい景色だから。」

ブドリは持つて来たアルコールランプに火を入れて、茶をわかしはじめました。空にはだんだん雲が出て、それに日ももう落ちたのか、海はさびしい灰いろに変わり、たくさんの白い波がしらは、いつせいに火山のすそに寄せて来ました。

ふとブドリはすぐ目の前に、いつか見たことのあるおかしな形の小さな飛行船が飛んでいるのを見つけました。老技師もはねあがりました。

「あ、クーボー君がやって来た。」ブドリも続いて小屋をとび出しました。飛行船はもう小屋の左側の大きな岩の壁の上にとまって、中からせいの高いクーボー大博士がひらりと飛びおりていました。博士はしばらくその辺の岩の大きなさげ目をさが

していましたが、やっとそれを見つけたと見えて、手早くねじをしめて飛行船をつなぎました。

「お茶をよばれに来たよ。ゆれるかい。」大博士はにやにやわらって言いました。老技師が答えました。

「まだそんなでない。けれども、どうも岩がぼろぼろ上から落ちてきているらしいんだ。」

ちようどその時、山はにわかにおこったように鳴り出し、ブドリは目の前が青くなつたように思いました。山はぐらぐら続けてゆれました。見るとクーボー大博士も老技師もしゃがんで岩へしがみついています。飛行船も大きな波に乗った船のようにゆっくりゆれておりました。

地震はやつとやみ、クーボー大博士は起きあがつてすたすたと小屋へはいつて行きました。中ではお茶がひっくり返って、

アルコールが青くぼかぼか燃えていました。クーボー大博士は器械をすっかり調べて、それから老技師といろいろ話しました。そしてしまいに言いました。

「もうどうしても、来年は潮汐発電所ちようせきを全部作ってしまわなければならぬ。それができれば今度のような場合にもその日のうちに仕事ができるし、ブドリ君が言っている沼ばたけの肥料も降らせられるんだ。」

「早魘かんぼつだつてちつともこわくなくなるからな。」ペンネン技師も言いました。ブドリは胸がわくわくしました。山まで踊りあがっているように思いました。じつさい山は、その時はげしくゆれ出して、ブドリは床へ投げ出されていたのです。大博士が言いました。

「やるぞ、やるぞ。いまのはサンムトリの市へも、かなり感じ

たにちがいない。」

老技師が言いました。

「今のはぼくらの足もとから、北へ一キロばかり、地表下七百メートルぐらいの所で、この小屋の六七十倍ぐらいの岩の塊かたまりが熔岩ようがんの中へ落ち込んだらしいのだ。ところがガスがいよいよ最後の岩の皮をはね飛ばすまでには、そんな塊を百も二百も、じぶんのからだの中にとらなければならぬ。」

大博士はしばらく考えていましたが、

「そうだ、僕はこれで失敬しよう。」と言って小屋を出て、いつかひらりと船に乗ってしまいました。老技師とブドリは、大博士があかりを二三度振って挨拶あいさつしながら、山をまわって向こうへ行くのを見送ってまた小屋にはいり、かわるがわる眠つたり観測したりしました。そして明け方ふもとへ工作隊がつかま

と、老技師はブドリを一人小屋に残して、きのう指さしたあの草地まで降りて行きました。みんなの声や、鉄の材料の触れ合う音は、下から風の吹き上げるときは、手にとるように聞こえました。ペンネン技師からはひっきりなしに、向こうの仕事の進み具合も知らせてよこし、ガスの圧力や山の形の変わりようも尋ねて来ました。それから三日の間は、はげしい地震や地鳴りのなかで、ブドリのほうもふもとのほうもほとんど眠るひまさえありませんでした。その四日目の午前、老技師からの発信が言つて来ました。

「ブドリ君だな。すっかりしたくができた。急いで降りてきたまえ。観測の器械は一ペン調べてそのままにして、表は全部持つてくるのだ。もうその小屋はきょうの午後にはなくなるんだから。」

ブドリはすっかり言われたとおりにして山を降りて行きました。そこにはいままで局の倉庫にあつた大きな鉄材が、すつかり櫓やぐらに組み立っていて、いろいろな器械はもう電流さえ来ればすぐに働き出すばかりになっていました。ペンネン技師の頬ほおはげっそり落ち、工作隊の人たちも青ざめて目ばかり光らせながら、それでもみんな笑つてブドリあいつに挨拶しました。

老技師が言いました。

「では引き上げよう。みんなしたくして車に乗りたまえ。」みんなは大急ぎで二十台の自動車に乗りました。車は列になつて山のすそを一散にサンムトりの市に走りました。ちょうど山と市とのまん中どこで、技師は自動車をとめさせました。「ここへ天幕てんとを張りたまえ。そしてみんなで眠るんだ。」みんなは、物をひとつとも言えずに、そのとおりにして倒れるようにねむつて

しまいました。その午後、老技師は受話器を置いて叫びました。「さあ電線は届いたぞ。ブドリ君、始めるよ。」老技師はスイッチを入れました。ブドリたちは、天幕てんとの外に出て、サンムトリの中腹を見つめました。野原には、白百合しらゆりがいちめんに咲き、その向こうにサンムトリが青くひっそり立っていました。

にわかにはサンムトリの左のすそがぐらぐらつとゆれ、まつ黒なけむりがぱつと立ったと思うとまつすぐに天までのぼつて行って、おかしなきのこの形になり、その足もとから黄金色きんいろの熔岩ようがんが、がんきらきら流れ出して、見るまにずうつと扇形にひろがりながら海へはいました。と思うと地面ははげしくぐらぐらゆれ、百合の花もいちめんゆれ、それからごうつというような大きな音が、みんなを倒すくらい強くやってきました。それから風がどうつと吹いて行きました。

「やったやった。」とみんなはそつちに手を延ばして高く叫びました。この時サンムトリの煙は、くずれるようにそらいっぱいひろがって来ましたが、たちまちそらはまっ暗になって、熱いこいしがばらばらばら降ってきました。みんなは天幕の中にはいつて心配そうにしていますが、ペンネン技師は、時計を見ながら、

「ブドリ君、うまく行つた。危険はもう全くない。市のほうへは灰をすこし降らせるだけだろう。」と言いました。こいしはだんだん灰にかかりました。それもまもなく薄くなって、みんなはまた天幕の外へ飛び出しました。野原はまるで一めんねずみいろになって、灰は一寸ばかり積もり、百合の花はみんな折れて灰に埋まり、空は変に緑いろでした。そしてサンムトリのすそには小さなこぶができて、そこから灰いろの煙が、まだどん

どんのぼつておりました。

その夕方、みんなは灰やこいしを踏んで、もう一度山へのぼつて、新しい観測の器械を据え着けて帰りました。

七 雲の海

それから四年の間に、クーボー大博士の計画どおり、ちようせき潮汐発電所は、イーハトーヴの海岸に沿つて、二百も配置されました。イーハトーヴをめぐる火山には、観測小屋といっしよに、白く塗られた鉄の櫓やぐらが順々に建ちました。

ブドリは技師心得になつて、一年の大部分は火山から火山と回つてあるいたり、あぶなくなつた火山を工作したりしていました。

次の年の春、イーハトーヴの火山局では、次のようなポスターを村や町へ張りました。

「窒素肥料を降らせませす。

ことしの夏、雨といつしよに、硝酸アムモニヤをみなさんの沼ばたけや蔬菜そさいばたけに降らせませすから、肥料を使うかたは、その分を入れて計算してください。分量は百メートル四方につき百二十キログラムです。

雨もすこしは降らせませす。

旱魃かんぼつの際には、とにかく作物の枯れないぐらいの雨は降らせることができませすから、いままで水が来なくなつて作付さくづけしなかつた沼ばたけも、ことしは心配せずに植え付けてください。」

その年の六月、ブドリはイーハトーヴのまん中にあたるイーハトーヴ火山の頂上の小屋におりました。下はいちめん灰いろをした雲の海でした。そのあちこちからイーハトーヴじゅうの火山のいただきが、ちようど島のように黒く出ておりました。その雲のすぐ上を一隻せきの飛行船が、船尾からまつ白な煙を噴ふいて、一つの峯から一つの峯へちようど橋をかけるように飛びまわっていました。そのけむりは、時間がたつほどだんだん太くはつきりなつてしずかに下の雲の海に落ちかぶさり、まもなく、いちめんの雲の海にはうす白く光る大きな網が山から山へ張りわたされました。いつか飛行船はけむりを納めて、しばらくあいさつ挨拶するようにはかを描いていましたが、やがて船首をたれてしずかに雲の中へ沈んで行つてしまいました。

受話器がジーと鳴りました。ペンネン技師の声でした。

「飛行船はいま帰つて来た。下のほうのしたくはすつかりいい。雨はざあざあ降っている。もうよかろうと思う。はじめてくれたまえ。」

ブドリはぼたんを押ししました。見る見るさつきけむりの網は、美しい桃いろや青や紫に、パツパツと目もさめるようにかがやきながら、ついたり消えたりしました。ブドリはまるでうつとりとしてそれに見とれました。そのうちにだんだん日は暮れて、雲の海もあかりが消えたときは、灰いろかねずみいろかわからないようになりました。

受話器が鳴りました。

「硝酸アムモニヤはもう雨の中へでてきている。量もこれぐらいならちようどいい。移動のぐあいもいいらしい。あと四時間や

れば、もうこの地方は今月中はたくさんだろう。つづけてやつてくれたまえ。」

ブドリはもううれしくつてはね上がりたいくらいでした。

この雲の下で昔の赤ひげの主人も、となりの石油がこやしになるかと言った人も、みんなよろこんで雨の音を聞いている。そしてあすの朝は、見違えるように緑いろになったオリザの株を手でなでたりするだろう。まるで夢のようだと思いながら、雲のまっくらになつたり、また美しく輝いたりするのをながめておりました。ところが短い夏の夜はもう明けらしかつたのです。電光の合間に、東の雲の海のはてがぼんやり黄ばんでいたのでした。

ところがそれは月が出るのでした。大きな黄いろな月がしずかにのぼってくるのでした。そして雲が青く光るときは変に白つ

ぼく見え、桃いろに光るときは何かわらつて見えるように見えるのでした。ブドリは、もうじぶんがだれなのか、何をしているのか忘れてしまつて、ただぼんやりそれをみつめていました。

受話器はジーと鳴りました。

「こつちではだいぶ雷が鳴りだして来た。網があちこちちぎれたらしい。あんまり鳴らすとあしたの新聞が悪口を言うからもう十分ばかりでやめよう。」

ブドリは受話器を置いて耳をすましました。雲の海はあつちでもこつちでもぶつぶつぶつぶつぶやいているのです。よく気をつけて聞くとやっぱりそれはきれぎれの雷の音でした。

ブドリはスイッチを切りました。にわかには月のあかりだけになった雲の海は、やっぱりしずかに北へ流れています。ブドリは毛布をからだに巻いてぐっすり眠りました。

八 秋

その年の農作物の収穫は、気候のせいもありましたが、十年の間にもなかつたほど、よくできましたので、火山局にはあつちからもこつちからも感謝状や激励の手紙が届きました。ブドリははじめてほんとうに生きがいがあるように思いました。

ところがある日、ブドリがタチナという火山へ行つた帰り、とりいれの済んでがらんとした沼ばたけの中の小さな村を通りかかりました。ちようどひるころなので、パンを買おうと思つて、一軒の雑貨や菓子を買つている店へ寄つて、

「パンはありませんか。」とききました。するとそこには三人のはだしの人たちが、目をまっ赤かにして酒を飲んでおりましたが、

一人が立ち上がって、

「パンはあるが、どうも食われないパンでな。石盤セキパンだもな。」とおかしなことを言いますと、みんなはおもしろそうにブドリの顔を見てどつと笑いました。ブドリはいやになって、ぷいっと表へ出ましたら、向こうから髪を角刈りにしたせいの高い男が来て、いきなり、

「おい、お前、ことしの夏、電気でこやし降らせたブドリだな。」と言いました。

「そうだ。」ブドリは何げなく答えました。その男は高く叫びました。

「火山局のブドリが来たぞ。みんな集まれ。」

すると今の家の中やそこらの畑から、十八人の百姓たちが、げらげらわらってかけて来ました。

「この野郎、きさまの電気のおかげで、おいらのオリザ、みんな倒れてしまったぞ。何^なしてあんなまねしたんだ。」一人が言いました。

ブドリはしずかに言いました。

「倒れるなんて、きみらは春に出したポスターを見なかったのか。」

「何この野郎。」いきなり一人がブドリの帽子をたたき落としました。それからみんなは寄つてたかつてブドリをなぐつたりふんだりしました。ブドリはどうとう何がなんだかわからなくなつて倒れてしまいました。

気がついてみるとブドリはどこかの病院らしい室の白いベッドに寝ていました。枕^{まくら}もとには見舞いの電報や、たくさんの手紙がありました。ブドリのからだじゅうは痛くて熱く、動くこ

とができませんでした。けれどもそれから一週間ばかりたちますと、もうブドリはもとの元氣になつていました。そして新聞で、あのときの出来事は、肥料の入れようをまちがつて教えた農業技師が、オリザの倒れたのをみんな火山局のせいにして、ごまかしていたためだということを読んで、大きな声で一人で笑いました。

その次の日の午後、病院の小使がはいつて来て、

「ネリというご婦人のおかたがたずねておいでになりました。」
 と言いました。ブドリは夢ではないかと思いましたが、まもなく一人の日に焼けた百姓のおかみさんのような人が、おずおずとはいつて来ました。それはまるで変わつてはいましたが、あの森の中からだれかにつれて行かれたネリだったので。二人はしばらく物も言えませんでした。やつとブドリが、その後

のことをたずねますと、ネリもぼつぼつとイーハトーヴの百姓のことばで、今までのことを話しました。ネリを連れて行ったあの男は、三日ばかりの後、めんどろくさくなつたのか、ある小さな牧場の近くへネリを残して、どこかへ行つてしまつたのでした。

ネリがそこらを泣いて歩いていきますと、その牧場の主人がかわいそうに思つて家へ入れて、赤ん坊のお守もりをさせたりしていましたが、だんだんネリはなんでも働けるようになったので、とうとう三四年前にその小さな牧場のいちばん上の息子むすこと結婚したというのでした。そしてことしは肥料も降つたので、いつもなら厩肥まやごえを遠くの畑まで運び出さなければならず、たいへん難儀したのを、近くのかぶら畑へみんな入れたし、遠くの玉蜀黍とうもろこしもよくできたので、家じゅうみんなよろこんでいるというよう

なことも言いしました。またあの森の中へ主人の息子といつしよに何べんも行つて見たけれども、家はすっかりこわれていたし、ブドリはどこへ行つたかわからないので、いつもがっかりして帰つていたら、きのう新聞で主人がブドリのけがをしたことを読んだので、やっとこつちへたずねて来たということも言いしました。ブドリは、なおつたらきつとその家へたずねて行つてお礼を言う約束をしてネリを帰しました。

九 カルボナード島

それからの五年は、ブドリにはほんとうに楽しいものでした。赤ひげの主人の家にも何べんもお礼に行きました。

もうよほど年はとつていましたが、やはり非常な元気で、こ

んどは毛の長いうさぎを千匹以上飼つたり、赤い甘藍かんらんばかり畑に作つたり、相変わらざるの山師はやっていましたが、暮らしはずうつといいようでした。

ネリには、かわいらしい男の子が生まれました。冬に仕事がひまになると、ネリはその子にすっかりこどもの百姓のようなかたちをさせて、主人といっしょに、ブドリの家にたずねて来て、泊まつて行つたりするのです。

ある日、ブドリのところへ、昔てぐす飼いの男にブドリといっしょに使われていた人がたずねて来て、ブドリたちのおとうさんのお墓が森のいちばんはずれの大きな榎かやの木の下にあるということを教えて行きました。それは、はじめ、てぐす飼いの男が森に来て、森じゅうの木を見てあるいたとき、ブドリのおとうさんたちの冷たくなつたからだを見つけて、ブドリに知らせ

ないように、そつと土に埋めて、上へ一本の樺かばの枝をたてておいたというのでした。ブドリは、すぐネリたちをつれてそこへ行つて、白い石灰岩の墓をたてて、それからもその辺を通るたびにいつも寄つてくるのでした。

そしてちょうどブドリが二十七の年でした。どうもあの恐ろしい寒い氣候がまた来るような模様でした。測候所では、太陽の調子や北のほうの海の氷の様子から、その年の二月にみんなへそれを予報しました。それが一足ずつだんだんほんとうになつて、こぶしの花が咲かなかつたり、五月に十日もみぞれが降つたりしますと、みんなはもうこの前の凶作を思い出して、生きたそらもありませんでした。クーボー大博士も、たびたび氣象や農業の技師たちと相談したり、意見を新聞へ出したりしましたが、やっぱりこの激しい寒さだけはどうともできないようす

でした。

ところが六月もはじめになつて、まだ黄いろなオリザの苗や、芽を出さない木を見ますと、ブドリはもういても立つてもいられませんでした。このままで過ぎるなら、森にも野原にも、ちやうどあの年のブドリの家族のようになる人がたくさんできるのです。ブドリはまるで物も食わずに幾晩も幾晩も考えました。ある晩ブドリは、クーボー大博士のうちをたずねました。

「先生、気層のなかに炭酸ガスがふえて来れば暖かくなるのですか。」

「それはなるだろう。地球ができてからいままでの気温は、たいてい空気中の炭酸ガスの量できまつていたと言われるくらいだからね。」

「カルボナード火山島が、いま爆発したら、この気候を変える

くらいの炭酸ガスを噴くでしようか。」

「それは僕も計算した。あれがいま爆発すれば、ガスはすぐ大循環の上層の風にまじって地球ぜんたいを包むだろう。そして下層の空気や地表からの熱の放散を防ぎ、地球全体を平均で五度ぐらい暖かくするだろうと思う。」

「先生、あれを今すぐ噴かせられないでしようか。」

「それはできるだろう。けれども、その仕事に行つたものうち、最後の一人はどうしても逃げられないのでね。」

「先生、私にそれをやらしてください。どうか先生からペンネン先生へお許しの出るようおことばをください。」

「それはいけない。きみはまだ若いし、いまのきみの仕事にかわれるものはそうはない。」

「私のようなものは、これからたくさんできます。私よりもつ

ともつとなんでもできる人が、私よりもつと立派にもつと美しく、仕事をしたり笑ったりして行くのですから。」

「その相談は僕はいかん。ペンネン技師に話したまえ。」

ブドリは帰つて来て、ペンネン技師に相談しました。技師はうなずきました。

「それはいい。けれども僕がやろう。僕はことしもう六十三なのだ。ここで死ぬなら全く本望というものだ。」

「先生、けれどもこの仕事はまだあんまり不確かです。一ぺんうまく爆発してもまもなくガスが雨にとられてしまうかもしれないし、また何もかも思ったとおりにいかないかもしれない。先生が今度おいでになつてしまつては、あとなんともくふうがつかなくなると存じます。」

老技師はだまつて首をたれてしまいました。

それから三日の後、火山局の船が、カルボナード島へ急いで行きました。そこへいくつもものやぐらは建ち、電線は連結されました。

すっかりしたくができると、ブドリはみんなを船で帰してしまつて、じぶんは一人島に残りました。

そしてその次の日、イーハトーヴの人たちは、青ぞらが緑いろに濁り、日や月が銅いろあかがねになつたのを見ました。

けれどもそれから三四日たちますと、気候はぐんぐん暖かくなつてきて、その秋はほぼ普通の作柄になりました。そしてちようど、このお話のはじまりのようになるはずの、たくさんのブドリのおとうさんやおかあさんは、たくさんのブドリやネリといっしょに、その冬を暖かいたべものたきぎと、明るい薪で楽しく暮らすことができたのでした。

グスコープドリの伝記

グスコープドリの伝記

底本：「童話集 風の又三郎」岩波文庫、岩波書店
1951（昭和 26）年 4 月 25 日第 1 刷発行
1997（平成 9）年 8 月 4 日第 70 刷発行

入力：柴田卓治

校正：松永正敏

2004 年 1 月 5 日作成

2004 年 3 月 22 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作
にあたったのは、ボランティアの皆さんです。